

# 野鳥大判

—北海道—

第45号

編集・発行 北海道野鳥愛護会

発行年月日 昭和56年9月21日



ヨ タ カ 美唄市光珠内 1970. 6. 撮影 村野紀雄



# も く じ

- 探鳥地案内(恵庭公園) ..... 2
- 二風谷の鳥類.....長井 博..... 3
- 奥尻島探鳥記.....小山政弘・小山弘昭..... 7
- チェックリストのこれまでとこれから.....小川 巖..... 9
- ウトナイ湖サンクチュアリから.....安西英明.....10
- 探鳥会報告.....植苗・福移.....11
- 探鳥会案内.....12
- 鳥民だより.....12
- 編集後記.....12

## 恵庭公園

◆位置 恵庭市駒場町

◆概況 恵庭市の市街地の千歳寄りの一角にある恵庭公園は、周囲およそ3kmの都市公園である。しかし、公園敷地の約60%は森林であり、樹木の種類は40を超えるといわれ、植生は豊かである。また、中央部を流れる清流ユカンボン川は園内に源を発し、原始の自然さながら澄明なたたずまいを見せる。

残雪の中、春を告げるゴジュウカラの笛の音でにわかには活気づき、5月から6月にかけて、アオジ・キビタキ・アカハラ・クロツグミ等の出現でさえずりは絶頂となる。時として耳にするアカショウビンやアオバトの声は、ここが町中の公園であることをしばし忘れさせる。繁殖がピークを過ぎる夏の一時期は、林内は閑散としているが、秋の通過鳥が公園の鳥相をより豊かなものにする。秋から冬を経て春に至るまでの間、ヤマゲラ・オオアカゲラ・キバシリ・ウソ・ミソサザイ等が姿を見せてくれる。

園内には遊歩道が縦横に走り、いずれも探鳥のコースに適するが、ユカンボン川を境に札幌側は下草刈のために個体数はやや少ない。

◆上記以外に見られる鳥 オオジシギ・キジバト・カクコウ・アカゲラ・コゲラ・ハクセキレイ・キセキレイ・ヒヨドリ・ツグミ・メボソムシクイ・センダイムシクイ・オオルリ・コサメビタキ・エナガ・ハンプト

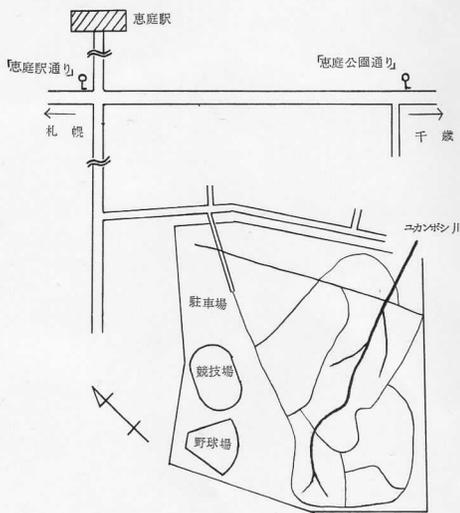
## 探鳥地案内

⑮

ガラ・コガラ・ヤマガラ・シジュウカラ・アトリ・イカル・ニューナイスズメ・コムクドリ・ムクドリ・カケス・ハンボンガラス等、年間通じて60種以上。

◆交通 国鉄恵庭駅より1.6km、36号線「恵庭駅通り」バス停より1km

(中央バス 特急・急行・快速及び道南バス)、36号線「恵庭公園通り」バス停より0.6km(中央バス快速)。



竹田義明 ☎061-14 恵庭市柏木26-27

# 二風谷の鳥類

長井 博

苫小牧寄りの日高地方に位置する<sup>さる びらとり にぶだに</sup>沙流郡平取町二風谷は、アイヌ文化のふるさととして広く知られている。アイヌ文化の地域による特徴を理解する手だての一つとして川筋文化圏を考えると、鶴川と門別川の間にある沙流川文化圏ということになる。沙流川の旧アイヌ語名は、シンリムカと呼ばれていたらしい。冬季になると上流から流れて来る氷で河口が詰まる、その詰まる状態、口を閉ざす状態をアイヌ語で muk と言い、鶴川の語源と考えられる。それを更に強調して、本当に河口の詰まる所の意として、シンリを付けたのであろう。鶴川に対して発祥した地名と言えよう。人間が文化を形成する過程で、生活の場を支配する自然環境は、いの一に重要であり、文化と無縁の地名もあり得ないが故に簡単に紹介した。

私をはじめ二風谷を訪れたのは、1972年6月、親友小山政弘氏の案内による。縁あってアイヌ研究者萱野茂先生の仕事を手伝うようになり、今日に至っている。

この記録は1973年9月から、1981年7月までの約8年間のものである。自宅は札幌にあるので、二風谷滞在中の早朝の散歩の時の目撃を主としたリストであり、ラインやポイントを決めた観察ではない。観察地域は図の点線内である。田、畑、牧草地、河川が含まれているが、あまり太い樹木はない。

観察に使った機材は、7倍の双眼鏡のみである。

20倍プロミナーは営巢の確認に使用しただけで、種の識別には使用していない。散歩の時のリストであるから、それ故にシビアなものではない。但し3回以上目撃したもののリストであって、自分でも首をかしげなくなる珍鳥らしきものは除外してある。

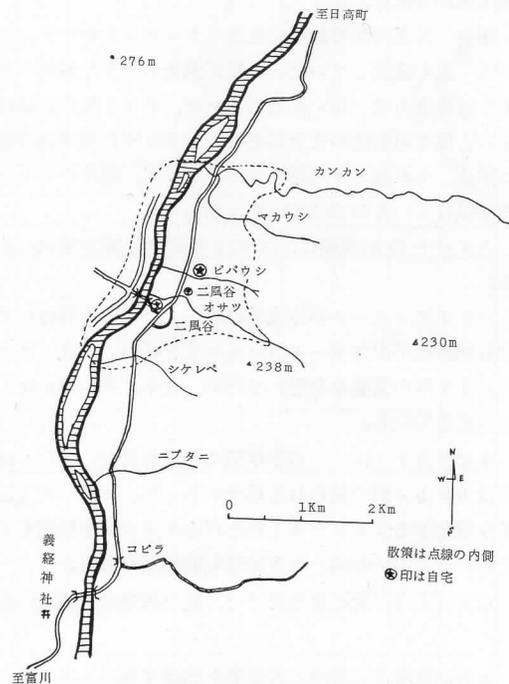
なお、このリストは、鷺田善幸氏の富川のリストと合わせて見て戴ければ幸いである。二風谷は、富川から沙流川を溯ること約18kmに位置している。下流と中流域の鳥相が判ると思う。

参考文献としては、藤巻裕蔵氏、芳賀良一氏による「二風谷ダム、平取ダム 環境調査報告書」1979年がある。他に信憑性のあるものはない。アイヌの口伝々承が若干あるが、大正、昭和初期のもので、量としては多くないので、筆者は公表を迷っている。

## リストの補足説明

アオサギの出現率は高く、沙流川が氷に閉ざされる季節以外であれば、普通に見られる。しかし個体数は少ない。上流の支流貫気別川では個体数がやや多い。新冠のコロニーから飛来しているものと思われる。

アマサギは河川敷内の馬の放牧地で見られるが1羽の



ことが多い。リストにはないが、チュウサギがカンカン沢の川口で一度出現している。

私がヒシクイを見たのは、いずれも30羽ほどの群飛で、春も秋も富川方向へ向かっていた。なぜだろうか？地元の人達から、沙流川についているのを見たという話をよく聞かされるが、私は見ていない。群飛の高度の低さから判断して、ありうることだと思っている。

オオハクチョウが3羽、2週間ほど河川の近くの田んぼにいたことがある。特に弱っている様子はなかったが、この地では滅多に見られない。

オンドリ、マガモ、カルガモは普通に見られるが数は多くない。リストの上で少ない印象を与えるが、私の記載もれである。穂別では筆者がオンドリの繁殖を確認している。アイヌの伝承によるも、大正期以降二風谷での繁殖の話はなく、穂別で繁殖していると伝えられている。オカヨシガモは、個体数こそ数羽と少ないが、筆者は何回も目撃している。上流岩知志でも目撃したことがある。

トビは年間100パーセント出現する。ハヤブサもよく見かける。クマタカは8年間の内ワンシーズンしか出現しなかった。1980年にチョウゲンボウを頻繁に目撃した。チゴハヤブサはこの8年間、繁殖している。

キジは普通に見られ営巣も多い。が、エゾライチョウは禁猟区になるまでの間、ほとんど見られなかった。近年は、特に珍らしくなくなってしまった。

毎年ヒクイナの繁殖を見ていたが、某氏の池に水道の水が流入して金魚やカエルが全滅した1979年以降、繁殖を目撃していない。しかし鳴き声を聞いているので、生息は確かである。

藤巻、芳賀両氏の記録にあるイカルチドリやキアシシギは一度も確認していない。私が飛来しそうな場所へあまり足を運んでいないからで、シギ、チドリ類の記録はもっと出る可能性が充分にある。ヤマシギの飛来は非常に早く、それ故アイヌ語でリヤチピヤク、越冬シギの意で呼ばれているのではないかと思われる。

アオバトの出現率は、この8年間でも減少傾向にある。

ハリオアマツバメの出現率は高い。カワセミ科はいずれも個体数が少なく、アカショウビンについては、8年前に3ヶ所の営巣地を思わせたが、近年、声も聞かなくなっている。

オオアカゲラは、この3年間に一度も見ていない。以前はカンカン沢で見られる場所があった。オサツ沢方面より飛来するミユビゲラと思われるキツツキを何回も見たという人がいるが、もう50年も前の話である。

ビンズイは、秋に見ただけで、他の季節には見ていない。

モズは毎年3ヶ所ほどの営巣を確認するが、アカモズ

は一度も見えていない。

ヒレンジャクは数羽の群れを1980年12月に数回続けて見ただけである。

カワガラスは沢歩きの際にまれに見ているが、ミソサザイは私の別荘の庭にも飛来する。

ノゴマの秋の渡りの時期には、朝もやの中で至近距離で群れを何回も見ている。

当地でも越冬トラグミの話をつらつら聞いたが、私の知る限りただのツグミである。毎年4月中に渡来するが、3月までには一度も見ていない。

秋の山葡萄のシーズンにサメビタキを一度だけ目撃したが、リストには入れていない。

当地において、ヤマガラは出現率があまりにも少ないので不思議に思っている。ヒガラムも個体数が少ない。

リスト中ハシブトガラに+印を記載していないのは理由がある。別荘のバードテーブルにいつも飛来するコガラを4mの距離から見続けて個体の特徴を覚え込んでしまった。1月2月はコガラと信じていたのだが、3月4月には同じ個体がハシブトガラに見え、4月末頃からは、またコガラに見えてきてしまって、すっかり判らなくなってしまったからだ。気象条件によってふくらみも色艶も、鳴き声までもずいぶん変化する。ハシブトガラとコガラに関する識別のために、文献も少しは読んだものであったが、正直なところ、現在はお手あげである。藤巻氏に直接教えを請いたい一人である。私も調査員の一人として為したウトナイのSNKリストや正當報告のハシブトガラについては、一部自信を失っている。

ホオジロは二風谷の代表的な鳥だと思っている。ミヤマホオジロやベニマシコは、別荘の庭によく飛来する。晩秋にハギマシコを数回見たが記録忘れのために何月であったか判らず、リストから除いてある。滅多に見られない。オオマシコは3年間続けて庭に飛来していた。コイカルは庭にしばらく居ついたが、バードテーブルには一回もとまらなかった。

スズメは人家や田畑でうんざりするほど見るのだが、沢歩きでは一回も見た事がない。

面白いのは冬季間のカラスで、早朝には沙流川の上を次から次へと下流に向かって飛び、午後になると下流から上流に向かって飛ぶ。丸一日をつぶしてカウントしてみようかと何度も考えたが実現していない。何千羽が二風谷を通過するのか興味がある。毎年数回は、400羽〜600羽の群れを見る。異様な光景だ。

二風谷ではオオジュリンとアリスイを一回も目撃していない。アリスイを見ない理由は、どうしても解らない。

野鳥以外では、キタキツネ、エゾシカ、ヒグマ、シマリス、エゾリス、マムシ、アオダイショウ等に会っている。

図の点線外では、エゾセンニュウ、マミジロ、コヨシキリ、シマフクロウを見ている。アオバズク、コミミズクも目撃しているが、記録もれのためにリストから除いてある。これ等の中で、少なくともシマフクロウの繁殖は、二風谷にはないと思われる。しかし日高地方で筆者は、8ミリで撮った経験もあり、数は少ないけれど繁殖の可能性はあるかもしれないと思っている。

結びに代えて

地元住民から、ダム建設が為されれば姿を消す野鳥がいるかどうか尋ねられることが度々あった。これについては返答に窮する。この8年間で、草地の開墾により、オオジシギの繁殖地が失われたり、宅地造成の為にオオ

ヨシキリの姿を見なくなったり、伐採によって昼なお暗い沢が、はげ山になり、鳥相の一変した所もある。古老から伝え聞く、過去50~60年間の自然環境の変化も、人間の歴史とは無縁でない。考えさせられる問題が多々ある。

空気が美味しくて豊かな自然に接する時、身も心もなごむ感じがする。しかし沢歩きから一歩出て、そこにツツジやシャクナゲの畑を見る時、なぜか心はなごまない。あるべき人の世を想定してみる時、大地の荒廃の根源には人の心の荒廃があるのではないかと思わずにはいられない。

二風谷の野鳥リスト (1973~1981)

科名	No.	種名	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
サギ	55	アマサギ					+	+						
	61	アオサギ				+	+	+	+	+	+	+	+	
ガンカモ	74	ヒシクイ			+								+	
	79	オオハクチョウ			+	+								
	85	オシドリ				+	+				+			
	86	マガモ		+										
	87	カルガモ										+		
	91	オカヨシガモ					+					+		
ワシタカ	116	ミサゴ									+	+		
	118	トビ	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
	124	ハイタカ		+	+	+					+	+		
	127	ノスリ										+	+	
	129	クマタカ										+		
	139	ハヤブサ	+	+	+	+	+					+	+	+
	140	チゴハヤブサ						+	+					
	142	チョウゲンボウ				+	+	+	+		+	+	+	+
ライチョウ	144	エゾライチョウ	+	+	+	+	+							+
キジ	148	コウライキジ	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
クイナ	160	ヒクイナ							+	+	+	+		
チドリ	173	コチドリ					+							
シギ	190	ウズラシギ					+							
	191	ハマシギ									+			
	212	イソシギ				+	+	+		+	+			
	222	ヤマシギ			+	+	+	+	+	+	+	+		
	227	オオジシギ				+	+	+	+	+	+	+		
ハト	288	キジバト	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
	290	アオバト					+	+	+	+	+			
ホトトギス	292	ジュウイチ					+	+						
	293	カッコウ					+	+						
	294	ツツドリ					+	+	+					
ヨタカ	306	ヨタカ						+	+	+				
アマツバメ	307	ハリオアマツバメ						+	+	+				
	309	アマツバメ							+	+	+			
カワセミ	310	ヤマセミ					+							

科名	No.	種名	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
カワセミ	312	アカシヨウビン						+	+					
	314	カワセミ									+	+		
キツツキ	320	ヤマゲラ			+	+	+	+	+	+	+	+	+	
	322	クマゲラ	+	+			+							
	324	アカゲラ	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
	325	オオアカゲラ				+								
	327	コゲラ	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
ヒバリ	332	ヒバリ				+	+	+	+	+	+	+		
ツバメ	335	ツバメ				+	+	+	+	+	+			
	338	イワツバメ					+	+	+					
セキレイ	342	キセキレイ			+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
	343	ハクセキレイ			+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
	344	セグロセキレイ	+	+		+								
	348	ビンズイ									+			
ヒヨドリ	355	ヒヨドリ	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
モズ	357	モズ				+	+	+	+	+	+	+		
	361	キレンジャク	+	+	+									+
レンジャク	362	ヒレンジャク												+
	363	カワガラス				+								
カワガラス	364	ミソサザイ	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
	ヒタキ亜科	371	ノゴマ										+	+
373		コルリ					+	+						
376		ノビタキ				+	+	+	+					
383		トラツグミ				+	+	+	+	+	+	+		
386		クロツグミ				+	+	+	+	+				
387		アカハラ				+	+	+						
392		ツグミ	+	+	+	+								
ウグイス亜科		396	ヤブサメ					+	+	+				
	397	ウグイス					+							
	403	オオヨシキリ					+	+	+	+				
	407	メボソムシクイ				+	+	+	+			+		
	408	エゾムシクイ										+		
	409	センダイムシクイ						+	+	+				
	411	キクイタダキ										+	+	
ヒタキ亜科	414	キビタキ				+	+							
	417	オオルリ					+							
	420	コサメビタキ					+							
エナガ	422	エナガ	+	+	+	+	+				+	+	+	
シジュウカラ	424	ハシブトガラ												
	425	コガラ	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
	426	ヒガラ		+	+	+	+							
	427	ヤマガラ				+								
	428	シジュウカラ	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
ゴジュウカラ	429	ゴジュウカラ	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	
メジロ	431	メジロ					+					+		
ホオジロ	435	ホオジロ				+	+	+	+	+	+	+		
	438	ホオアカ					+	+						
	441	カシラダカ			+	+						+	+	+
	442	ミヤマホオジロ	+	+	+									+
	447	アオジ				+	+	+	+	+	+	+		
アトリ	457	カワラヒワ				+	+	+			+	+		
	458	マヒワ			+									
	459	ベニヒワ	+	+	+									+
	463	オオマシコ	+											+

科名	No.	種名	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
アトリ	467	ベニマシコ	+	+	+	+							+	+
	469	ウソ	+	+	+									
	470	コイカル			+									
	471	イカル							+	+	+			
	472	シメ					+	+	+					
ハタオリドリ	473	ニューナイズメ						+	+					
	474	スズメ	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
ムクドリ	476	コムクドリ					+	+						
	478	ムクドリ			+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
カラス	481	カケス	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
	488	ハシボソガラス	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
	489	ハシブトガラス	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
外	801	ドバト	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+

061-01 札幌市豊平区月寒東4条18丁目1番24号

# 奥尻島探鳥記

小山政弘・小山弘昭

奥尻島の鳥関係報告が皆無らしいと知ると、心落ち着かず。草木の新芽もえはじめた5月3日～5月5日、念願果たし奥尻島探鳥行を遂行した。島内巡りは正味1日。もとより詳細な調査とはならないが、確認種リストとしては初めてのものという点に勇気づけられ、以下不備ながら紹介するものである。

「イクシユン・シリ（沖の・島）」というアイヌ語島名よろしく、北海道本島側瀬棚、熊石、江差方面からは、かすかにしか見えないが、上陸して島巡りしてみると、周囲80kmの島はさすがに広く感じる。しかも、ブナを主体とするよく発達した森林と、大小多数の谷川は美しく、奇岩連なる海岸線の荒々しさ。加えて透明度の高い海の快さ等々、日頃騒音と濁気に汚されている者にとっては、正に別世界の名に相応しい島である。

今回は乗用車を利用して島内をほぼ一巡した。図中②のコースのみが徒歩観察で、他は車窓あるいは船上より観察したものである。

表には、全観察時に観察された種毎の個体数を示したが、もとより正確なものではない。

それぞれの区間内で見られた数、とといった意味で、時間、空間の要素は無視している。以後、それぞれ便宜的に分けた区域毎に少しく観察内容を紹介したい。

往路は、瀬棚より出発したフェリーポート甲板より海洋上の鳥を観察した。当時の天候は雨混りの北西風がやや強く、7倍双眼鏡での観察が限界で、20倍望遠鏡での観察は至難であった。出航後まもなくアビ科の鳥が散見

されたが、種名は判らなかつた。中間点を界に奥尻島側の海域にかかり、ミズナギドリ科の鳥群が目につきはじめた。鳥影が見えはじめた頃、船と並行して1羽のキョウジョングキが島に向かうのをしばらく観察した。

奥尻町史（昭和44年）によれば、タンチョウが毎年島を通過していたが、昭和11年12月青苗山野で負傷した雄を保護し、その番い雌1羽も雄の死後西浦海岸に死体と



なって漂着したのを最後の記録としている（雌雄の識別は本当かな？）。因みにこの雄の剥製は、当時の道庁保安課に保存されたとあるから事実を確める必要がある。

今回の観察でも青苗川流域山林は比較的豊かな鳥相の印象を受けた。地名の青苗は、アイヌ語古名「ワオ・ナイ」で、アオパトの沢の意味である。残念ながら今回はその声すら耳にしなかったが、町の人達の中には「気味悪い声」と恐れる向きがあるとか聞かされた。

島西岸の千畳岩は、棚状の岩礁が広がる海岸で、往年のニシン水揚げ場の跡。ここで海中のマガモ三番いを観察した。浅い潮溜りで盛んに採餌している点から、あるいはこの島内での繁殖の可能性もなきにしもあらずと考えてみた。キアシシギ1羽が寂しげに鳴き、夕暮れ迫る谷川にイツヒヨドリ・キセキレイ・ビンズイ・ハシボソガラスを印象深く観察した。

島内山林にあまり踏み入らなかった今回の観察では、軽はずみに森林の鳥を語ることが謹まなければならないが、キツキ類はその姿、声共に認められなかった。島北部球浦地区では、キツキ類が啄った朽木を一本発見したので、鳥の識者の一人山下英一氏にたずねると、幾種かのキツキ類は生息するとのことであった。ついで

に、同氏によれば1977年10月15日～18日に、島の東岸鍋釣岩付近で7羽のコブハクチョウが観察されたという。大沼公園から飛来した群れらしいとのこと。因みに、ウトナイ湖に飛来した同じく7羽のコブハクチョウは、同じ1977年の5月28日以降同湖に棲みついている。2地点での観察には時間的に大きなズレがあるので、この7羽の群れの足どりを連結し得ないが、コブハクチョウという飼鳥の飛行能力の意外な高さに驚かざるを得ない。

最後に顕著な印象を一つ。それは、島内山林ではヒガラがしばしば観察され、半面、他のカラ類がほとんど見られなかったという点。

明治11年鹿を6頭放し、戦後はコウライキジも放したそうであるが、現在はコウライキジのみ見かけられるとのことである。

植物学分野では、古く宮部金吾、ウルバイン・フォリー、館脇操等の調査報告があるが、動物学分野では、太田嘉四夫先生等によるネズミ調査以外見るべき報告はほとんどない。

今後、奥尻島に行かれる方は、是非、鳥を観察され、今回の私達のリストに確認種を加えていただきたい。

### 奥尻島にて観察された鳥類 (1981. 5. 3~5)

種	区 間 個体数	①	②	③	④		⑤		合 計
		青苗～神威 脇海岸線	青苗川流域 森 林	奥尻～球 浦～稲穂 ～奥尻	瀬 棚 → 奥 尻	奥 尻 → 江 差			
					15:12~ 16:12	16:13~ 17:10	16:50~ 17:50	17:51~ 19:25	
ア ビ 科 sp.					14				14
ミズナギドリ科 sp.						205	9		214
ウ ミ ウ	3		4	6	1		2		16
チュウサギ			1						1
オシドリ		2							2
マガモ	8								8
シノリガモ			1						1
カモ類 sp.					15				15
ハヤブサ	1								1
コチドリ	1								1
キョウジョシギ						1			1
キアシシギ	1								1
セグロカモメ	6				19	8			33
オオセグロカモメ	8		2		6	4	3		23
ワシカモメ			3						3
シロカモメ			1						1
ウミネコ	28		59	20	8	3	11		129
キジバト	2	1							3
ヒバリ	13		1						14
ツバメ		3	1						4
イワツバメ			5						5
キセキレイ	1								1
ハクセキレイ	18		2						20

種	区間 個体数	①	②	③	④		⑤		合 計
		青苗～神威 脇海岸線	青苗川流域 森林	奥尻～球 浦～稲穂 ～奥尻	瀬 棚 → 奥 尻	奥 尻 → 江 差			
					15:12～ 16:12	16:13～ 17:10	16:50～ 17:50	17:51～ 19:25	
ビ ン ズ イ			1	1					2
ヒ ヨ ド リ			2						2
イ ソ ヒ ヨ ド リ	4								4
ア カ ハ ラ			1						1
ツ グ ミ				2					2
ヤ ブ サ メ			4						4
ウ グ イ ス			5	6					11
センダイムシクイ			2	2					4
オ オ ル リ			2	1					3
コ ガ ラ				1					1
ヒ ガ ラ	2		10	32					44
(シジュウカラ) ※				(1)					(1)
ゴジュウカラ			2						2
ホ オ ジ ロ	8								8
カ シ ラ ダ カ	20	22		25					67
ア オ ジ	5	3		4					12
カ ワ ラ ヒ ワ	4	2		6					12
ベ ニ マ シ コ	1			1					2
ス ズ メ	4	3		4					11
コ ム ク ド リ	3								3
ム ク ド リ	5			3					8
ハシボソガラス	58	5		8					71
ハシブトガラス		14		3					17

※囀り・地鳴きで判定

小山 政 弘 ☎069-01 江別市大麻南樹町1 道職A P 4-204

小山 弘 昭 ☎061-21 札幌市南区石山531 栄養短大付属高校内

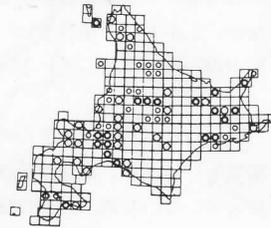
## チェックリストのこれまでとこれから

今回は、チェックリスト(前号同様、以下CLと略す)事業が、始められた経緯について振り返ってみることにしよう。そもそもCLは、今を去る4年前の昭和52年6月、当時の編集、企画の合同幹事会が、全道の野鳥分布図作成を目的として200余名の会員に往復ハガキを送付したのが発端であろう。この時は80名近い方から回答が寄せられ、その結果を「第1回野鳥調査のまとめ」として公表した(第30号、1977年)。この調査結果を踏まえ、翌年に向けての記録方法を検討する過程で、データの均質化が図られるメリットを生かして、CLの作成が決定されることになった。CLカードのサイズ、リストされる種類等について幹事会で数回の討議を加え、翌53年3月発行の第31号と共に全会員に送付した時点から本格的なCL事業がスタートしたことになる。当初は事務局からCLを送付した後は、各ブロック単位の代表者に記載済みのCLを回送してもらおう計画であったが、結局ブロック割りも代表者の委嘱も整わないまま今日に及んでい

る。これまで寄せられたCLは100枚弱——この数が多いか少ないかは、会員の判断に任せることにしよう。

なぜ今頃こんなことを書くのかというと、一部の協力的な会員を除き、幹事の間ですらこういった経緯が忘れられがちで、会の事業として必ずしも定着しているとは思えないからである。そこで「どっこいCLは生きている」ことを訴えるべく、本号と共にCLカードを同封することにした。手持ちの野帳、メモから転記して、事務局チェックリスト班宛送ってもらえれば幸いである。もちろん、今年のデータでなくても構いません。ご連絡頂ければ何枚でも送れるよう準備を整えている。重ねてお願いしたい。

チェックリスト班 小川 巖



# ウトナイ湖サンクチュアリから

(財)日本野鳥の会ウトナイ湖サンクチュアリレンジャー

安 西 英 明

「チョーチョーチョー」先日ネイチャー・センターでアオアシナギを聞いた。すでに秋の気配をおびた風が、湖岸から運んできた声だろう。その澄んだ音色は、ほんの一時ではあるが、言葉では表しがたい安らぎを私に与えてくれた。

「どうして鳥が好きなんですか？」これは私に限らず、鳥好きの人の多くが返答に戸惑う問いである。けれども鳥たちの魅力に気づかない人や、自然の中で彼らが繰り広げる様々なドラマを味わうすべを知らない人たちは、私たち鳥好きに向ってよくこの手の質問をするものだ。私はそういう人たちに、実際に野外へ出て鳥と接してもらいたいと思う。機会さえあれば、より多くの人たちが野鳥や自然から得る安らぎや感動、不思議さや発見などについて、解ってくれるのではないだろうか。

私は子供の頃から生き物が好きだった。学生時代には鳥の姿を求めて全国を歩き回った。様々な鳥や草花、動物たちとの出会い、鳥仲間との出会い、思い返せば楽しい思い出である。けれどもそこそこ、もうひとつ忘れられない現実があった。伐採、埋め立て、ゴミの山。そう、次々に痛めつけられていく自然の姿も垣間見てこなければならなかったのである。

どうすれば自然を守れるか。人間生活との接点をどこに求めるか。これはむずかしい問題だ。サンクチュアリにしてもこの難問を模索するためのひとつの試みにすぎない。しかし、手をこまねいているうちに自然は着実に減少の一途をたどっている。「試み」は急務であった。

サンクチュアリには2つの目的がある。ひとつは自然環境を守ること。既成の法律だけではなかなか効果があがっていないため、当初は募金運動で土地を買い上げる計画だった。が、苫小牧市の御好意によって、ウトナイ湖周辺の市有地約500ヘクタールを、サンクチュアリとして保全するための協約を、市と日本野鳥の会とで結ぶことができた。広大な勇払原野も苫東開発で消滅の運命にある。しかし、その北西の端ウトナイ湖周辺は、将来に渡って豊かな自然を残すことが可能となったわけである。

今ひとつの目的は、サンクチュアリ内の一部(約50ヘクタール)を人と自然とのふれ合いの場として、より多くの人に自然と接する機会を提供し、自然を大切にすることを広めようというものである。中心施設、ネイチャー・センターにはレンジャーが常駐し、案内役を務める。様々な展示、図書、資料、視聴覚室などは、教育や

研究の機能を持つ。自然観察路の途中にある観察小屋は、窓が横に細長くなっており、外の鳥から中の人は見えにくい。よって鳥を驚かさずに間近かで彼らを楽しむことができる。6・7月はシマアオジが歌い、オオジギがうなり、その他ノビタキ、ホオアカなどの鳥たちが堪能できた。

日本野鳥の会がサンクチュアリ運動をスタートさせたのは1976年だった。募金運動では全国から様々な形で浄財が集められた。ボーナスをそっくり寄付してくれた人、結婚式のお祝い金を送ってくれた夫婦、自分の学校や会社で募金活動をしてくれた人、子供がこずかいをためて送ってくれた例など枚挙にいとまがない。

その間、会員からアイデアを募集したり、サンクチュアリの普及しているイギリスに視察ツアーをくんだりして構想をねった。そして渡り鳥の中継地としての重要性、地元会員のバックアップ、市の協力、交通の便のよさ、保護の緊急性など様々な要素から第一号にウトナイ湖が決定した。

「自然を守るための地域だから、自然を荒らすことのないよう施設づくりをしよう」と、会員がボランティアで参加した。センターの設計は建築技師の会員が担当。外壁の焼き丸太はペンキや防錆剤を使わないようにと一本ずつ焼いて磨いたものである。下部には石や薪を積み小動物が住めるように工夫した。その他看板から展示にいたるまで、交通費も自前で全国から集まった鳥仲間が、知恵と汗を出し合って手づくりしたものである。

現在、下は幼稚園から上は老人クラブまで、道内・外の実に様々な人たちに利用されている。電話による野鳥についての問い合わせも多い。観光気分に来る人も少なくないが、ゴミは捨てずに持ち帰る、草木や虫も捕らない、コース以外にはむやみに立ち入らない、というお願いをして、自然が荒らされることのないよう配慮している。

サンクチュアリは野鳥や自然を愛する人々の善意と汗で産声をあげた。試行錯誤は続くだろうが、より多くの人々の声と協力でこれを育てていきたい。今後とも皆様の御指導をよろしく願いいたします。

☎059-13 苫小牧市植苗150-3

ウトナイ湖サンクチュアリネイチャーセンター内

TEL 0144-58-2505



## 植 苗 56. 6. 7 9:10~11:40 山 下 恵

探鳥会に参加するのは、これで私も3回目になる。回を重ねるごとにもしろくなっていくのが、自分でも不思議である。いつでも、その日の

ハイライトが必ずあるもので、今回は、シマアオジだった。この日は、植苗に着くと、まもなく、雨が降り出して、鳥もあまり姿を見せなかった。シマアオジに出会ったのは、その帰り道、駅のすぐそばの道路の脇の林だった。大きさはスズメくらい。顔が真黒で、おなか濃い黄色、茶色の背中で、のどにも茶色のバンドがある。オスだ。チョンチョンと動くたびに、おなかの黄色がチラチラして、かわいらしい。1m近くまで近寄っても逃げようとしな。片方の羽を負傷しているらしく、少しだらりとしている。飛べはするが、舞い上がることはできないらしい。私たちが遠巻きにとりかこんでも、悠然と道路まで出てきて、エサをついばんでいる。細い足をつっぱって飛び歩く様子がいたいたしい。このままにしておけば、きっと死ぬだろうと思うと、涙が出た。梅木さんが、大奮闘してつかまえたときには、とてもうれしかった。駅まで帽子に入れて、大切に運んだ。その後、シマアオジは、梅木さんのお宅で、元気に生きているそうである。弱肉強食の自然の法則には反するかもしれないけれど、どうか、元気に長生きしてください！

### (幹事から)

このシマアオジは、右翼を負傷しており、あまり飛ぶことができませんでした。間もなく肉食動物に捕食されるなどして、死亡するであろうと判断されました。

自然の法則に従うとすれば、そのままにしておくべき

でしたが、結果的には捕獲をし、保護することになりました。

飼育したところ、元気になりましたが、初列風切羽の数枚の羽根が反り上がった状態はなおりません。このまま飼育を続けるべきか考えましたが、野に返すことにしました。

7月5日、札幌市東区福移の探鳥会の折、元気で生きてくれることを願って放鳥しました。

一般に、負傷したり弱っている鳥獣をみつけた場合、治してあげたい、保護してあげたいと思うのは、自然な気持ちと言えるでしょう。ただ、保護する場合にもいろいろなケースがあって、一概には言いきれない面もありますが、自然の法則に任せることが最も賢明かも知れません。

(記録された鳥) アオサギ コブハクチョウ トビ オオジシギ キジバト カッコウ ツツドリ コゲラ ヒバリ ショウドウツバメ ハクセキレイ ヒヨドリ アカモズ ノビタキ アカハラ ヤブサメ コヨシキリ センダイムシクイ キビタキ シジュウカラ メジロ ホオアカ シマアオジ アオジ オオジュリン カワラヒワ シメ スズメ ムクドリ ハシブトガラス 種不明カモ (31種)

(参加者) 野口正男 渡辺紀久雄 長谷川涼子 新田順子 上田寿江 青木二郎 西村辰夫 五十川祐弘・ハナ子 霜村耕介 山本 一・トヨ 田辺 至 大坊幸七 梅木賢俊・翼 大黒ゆか 早瀬広司・富 住友順子 長沼まり子 荒木誓子 山下 恵 柳沢信雄・千代子 天童雅俊 羽田恭子 (27名)

(担当幹事) 早瀬広司 梅木賢俊

〒060 札幌市中央区北3西7緑苑ビル1012

## 福 移 56. 7. 5 8:40~10:00 新 田 順 子

水筒に番茶を注いでいる最中に、ラジオからの石狩地方午後から雨というアナウンスを耳にした。ここ連日、陽の眩しい美しい天気だったが、傘をザックに入れる。札幌線のバスが地上に出るや、車窓に雨粒が、あー。探鳥会に参加すること4度目。鳥の個体を、スズメ、ハト、カラス、以外にも見分けることが出来かけて、興に乗り、大いにハッスルしてやってきた福移例会は出発から霧雨。

ものものしく、対雨用武装をしている最中にも、モズだ、ホオアカだ、アオジだと声あり。6月7日、植苗での探鳥会の帰途、助けたシマアオジを野に返す。1ヶ月ゲージ内で暮した鳥が、重心不安定ながら百メートル先のカラ松林へ、ひとつ飛び去った。放鳥を見守って

た一同から拍手が起る。

石狩平野のこの辺りは、札幌市内ながら都市騒音から隔離されて、緑の原っぱ、直線状の防雪林の入り混った大地。所々から霧が立ち昇ってロマンチックな風情である。草原から雨の中へ突然鳥達が飛び立つ。鳩大だな、雀大だなと、サイズを判断するのにやっとの私の周囲から、キジバト、ヒバリ、オオジシギ、ムクドリ、等と声あり。神業の判別だと溜め息が出る。アオサギが遙か遠方の空に現れた由、当方は視界に納めること能ず。

石狩川の土手では、干草の上を鳥達がチョンチョン這い廻っている。川原に低い木々が散乱している所あり。枝々の葉陰から下草から、とびとびにつき出している枯茎の天辺へと巡回する小鳥の群。先達氏の望遠鏡で得心

のゆくまで見せてもらう。ノビタキの白紋。コヨシキリの貴品高き見目形。オオジュリンの頸のあたりの黒の中の白カーブを、然と記憶にこれ努める。カッコウがその真上を飛び去る。あまりにも早く視界から消え、観賞する余裕なく誠に残念。雨ますます激しく探鳥会はそこまで。

大通りバスセンターには、午前11時に戻っていた。初心者としては、3種類の鳥を鷹と眺められて満足。図鑑をみると鳥の観察の浅いことに気付かされ、反省することしきり。

(記録された鳥) アオサギ トビ オオジシギ キジバ

ト カッコウ ヒバリ モズ ノゴマ ノビタキ アカハラ シマセンニュウ コヨシキリ ホオジロ ホオアカ アオジ オオジュリン カワラヒワ ベニマシコスズメ コムクドリ ムクドリ (21種)

(参加者) 天童雅俊 新妻 博 谷口一芳・登志 古館泰行 早瀬広司 野々村 菊 長谷川涼子 野口正男 渡辺紀久雄 柳沢信雄・千代子 梅木賢俊 津田新平 羽田恭子 岩泉ゆう子 横田通典 吉田京子 新田順子 武田怜子 霜村耕介 (21名)

(担当幹事) 野口正男 長谷川涼子

〒063 札幌市西区二十四軒1条5丁目1-1-309



1月までの予定をお知らせします。どうぞご参加下さい。11月は、ガン、カモハクチョウなどの水鳥。12月は、カモメ類、カモ類など、1月は、給餌台に集まる鳥たち。寒い季節です。防寒の用意をお忘れなく。

<ウトナイ湖>

昭和56年11月15日(日) 午前10時 ウトナイ遊園地

<小樽港>

昭和56年12月13日(日) 午前10時 国鉄小樽駅待合室

<藤の沢>

昭和57年1月24日(日) 午前10時 札幌市南区藤の沢白鳥園、定鉄バス定山溪線藤の沢下車、白鳥園まで徒歩20分、室内から見るので雪が降っても行きます。参加費200円

<野幌森林公園を歩きましょう>

上記の探鳥会のほか、野幌森林公園で探鳥散歩を行います。11月22日(日)、12月6日(日) 午前8時30分、国鉄大麻駅集合です。いずれの探鳥会も、昼食、筆記用具、観察用具をご持参下さい。ひどい暴風雨、暴風雪でないかぎり行きます。探鳥会についてのお問い合わせは、北尾(011) 611-6455 へ。



<編集部から>

全道各地の探鳥の記録や会員の動勢などをお寄せいただくために各地ごとに連絡員をお願いすることを検討しています。連絡員にな

っていただける方がいらっしゃいましたら編集部までご一報ください。

<パードウィーク野鳥写真展について>

野鳥写真展を今年も、5月11日から6月13日まで、三菱信託銀行ロビーにて行いました。この写真展も今年で3回を数えることになったため、新しい企画で行っ

てはどうかという意見があり、多少工夫はしましたが、結局例年通りの方法で展示することになりました。

道内各地から寄せられた作品は、どれも撮影者の苦勞がしのばれるような力作揃いで、また応募点数も例年になく多く、1人で多数出品下さった方の作品は一部展示できなかったものもあるほどでした。

今回は新しい試みとして、来場した方に気に入った写真を選んで投票していただきました。その結果65名の投票があり、猪口さんのノビタキの写真が最も多数の票を得ました。前号(第44号)の表紙に使用したのがその写真です。また、投票して下さった方の中から抽選で20名の方に野鳥の絵はがきをお送りしました。

<おわびと訂正>

前号の門別町の野鳥リストに、下記の記録の印刷もれ及びリストの追加がありましたので、おわびして訂正いたします。

コルリ 7月、ヒバリ 3~10月、ツバメ 4~9月、ヒレンジャク '78(備考欄)、タゲリ '81. 4. 14、アカエリヒレアシギ '81. 5. 31.

[編] [集] [後] [記]

初めて編集を担当しましたが、出来映えはいかがでしょう。今回は長井さん、小山さんから記録をいただいたうえ、ウトナイサンクチュアリレンジャーの安

西さんもお便りをお送り下さり、充実した内容になりましたが、その反面やや紙面が硬くなりすぎたように思います。

各地の便り、身のまわりのできごとなどどしどしご投稿下さい。(島田)

〔北海道野鳥愛護会〕 年会費 1,500円(会計年度4月より) 郵便振替 小樽 18287  
〒060 札幌市中央区北1条西7丁目 広井ビル5階 北海道自然保護協会気付 ☎(011) 251-5465